

## 民衆生活と戦争経済(2) 1914年夏 第1次大戦の発端 とオーストリア民衆

著者	阿部 正昭
出版者	法政大学経済学部学会
雑誌名	経済志林
巻	63
号	4
ページ	135-162
発行年	1996-03-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/7823">http://hdl.handle.net/10114/7823</a>

## 【研究ノート】

## 民衆生活と戦争経済（その2）

—1914年夏 第一次大戦の発端とオーストリア民衆—

阿 部 正 昭

## 目 次

1. 開戦—民衆の熱狂と不安—
2. 総動員令と戦時体制の発足

## 1. 開戦—民衆の熱狂と不安—

（1）オーストリア・ハンガリー帝国は、1914年7月25日にセルビアとの外交関係を断絶し、7月28日に宣戦を布告した。宿縁の両国間の戦争は、当時の極度に緊張したヨーロッパ情勢のもとで、バルカン半島の限定された戦争にとどまることはできなかった。同盟国ドイツが8月1日にロシアと、8月3日にベルギー、フランスと開戦した後、帝国は8月6日にロシアと開戦したため、戦火は連鎖的にヨーロッパ全土に拡大し、全面的な世界戦争へと発展した。オーストリア・ハンガリーでは、1908年10月のボスニア・ヘルツェゴビナ併合と2回のバルカン戦争によって急速に重大化した、セルビアにおける反ハプスブルク運動に対して、根本的な解決策の必要性が声高に論議されていたが、サラエボ事件以後の7月の日々に、この世論は「セルビアに懲罰を」という民衆の熱狂を呼びおこした<sup>(1)</sup>。対セルビア開戦は、この民衆の戦争熱を頂点にまで高めた。1914年夏、とくにドイツ系新聞・雑誌の主な論調は、積年の問題解決と皇太子暗殺に対する報復のためとして戦争の必要性を強調して民衆を煽動し、しか

も「セルビアを容易に片付けることができ、戦争は短期的に終る」と予想し続けた。当時の代表的ジャーナリスト、ストープラーは、暗殺事件直後には慎重論を唱えていたが、開戦するや、次のように書いて戦争の正当性を主張した。

「セルビアに対する宣戦布告文はロシアとの戦争の可能性とその結果についても考慮に入れている。もし国の存亡のために戦うためならば、だれも道徳的正当性をも必要としない。わが帝国の存亡は、セルビアにより脅かされているだけでなく、汎スラブ主義とロシアにより強化されつつある包囲網によっても脅かされている。セルビアに対する帝国の一撃は、ロシアに対するものであるとともに、国内における個別利益を国全体の利益の上におくようなすべての勢力に向けられている。国内の力を集中してあたれば、セルビアは恐ろしい敵ではない。今は、国内の南スラブ主義的要素と戦う意志を示すためにもセルビアの意図をくじくことが、帝国の国民的文化的努力を集中して外部諸勢力にどんな希望も与えないことが、なによりも必要なのだ。バルカンの民族運動は、今までにも度々帝国の平和政策を不可能にしてきた。サラエボ事件以後、全バルカンはセルビアの鎮圧を望んでいる。この望はかなえられなくてはならない。さもなければ、帝国はバルカンにおける権威を最終的に失うことになる。」<sup>(2)</sup>

レーヴェンフェルト＝ルスも、彼の目にしたウィーン市民の興奮ぶりを妻に次のように伝えている。

「29日の夕方、ラートハウス前でデモ隊の大集会がありました。人々は議事堂から大学にかけて立ち尽くしていました。ラートハウスとブルクテアターの間は、一面に頭を並べたようでした。わたしはゲオルクと劇場の入り口階段に立ちました。いくつもの在郷軍人の集団が、音楽を奏で旗をなびかせていました。あたりは全部交通止めでした。8時半ごろ、市庁舎はライトアップされ、ヴァイスキルヒナー市長が演説しました。わたしには聞こえませんでした。それからすべての楽団が、同時にオーストリア、ドイツ、イタリアの国歌を演奏し、その間に大きな国旗が吊り下げら

れました。イタリア国旗も一緒でした。人々は、どよめき叫びごえをあげました。“セルビアを倒せ！ 暗殺者に死を！”。これほどの熱狂ぶりを、私はかつてついぞ見たことがありません。皆は脱帽したままでした。窓という窓からビラが撒かれました。ビラは風にあおられて、会場のいたるところに飛び散りました。そのビラにはこう書かれていました。“皇帝は明日帰京あそばされる”。リンクストラーセでは行進がつずき、あちこちで若者や老人の演説が見られました。』<sup>(3)</sup>

民衆の戦争熱は、首都ウィーンにとどまらずチロル地方でも同様だった。

「人々は戦争布告を馬鹿げていて退屈きわまる見せかけの平和の終りとして大いに歓迎した。インスブルック、ハレ、ボーゼン、ブリックセン、トリェント、クラウゼンの町々では、勇ましい軍楽隊の行進曲が鳴り響き、いたるところで民衆と軍人との間の歓びに満ちた交歓風景が見られた。一中略— 新聞は読者に呼びかけていた：“残忍なロシアのツァーとその文明にたいする戦いで仇敵ツァーを打倒してのみ、わが民衆の中に芽生えている自由の若木をコッサク騎兵の蹂躪から守ることができる”。一中略— 召集された予備役の士官や兵士それに新兵たちは、動員令による8月4日の入隊期限日を待ち切れず、1日には徴兵事務所の置かれた町に続々と集結した。それと入れ替りに、避暑客たちがチロルから慌ただしく引揚げていった。ドイツで働いていたイタリア人たちは、家族ともども列車で故国に向っていったが、その途中のチロルの駅頭で地元民の親切な接待を受けている様子が見られた。一中略— 召集された兵士たちを既存の兵舎に収容し切れなかったのも、その多くは周辺の民家に仮泊しなければならなかった。地元の山岳歩兵連隊は、動員令により平時の千人編成から戦時の六千人～七千人編成に増員されていたからである。』<sup>(4)</sup>

ステファン・ツヴァイクは、サラエボ事件を保養地バーデンで知った後に、戦争を予想しなかったのであろうか、例年のように夏の日々をベルギーの北海沿岸の保養地で過していた。開戦直後の混乱の中でウィーンに帰京した彼は、7月の日々と開戦当時のウィーンの熱狂ぶりを後年次のよ

うに回顧している。長文だが引用しておこう。

「私が例年のようにヴェルハーレンの小別荘の客になる前の二週間を過そうと思ったオステンデ近くの海水浴場ル・コックでも、同じように苦勞も知らなげな気分が支配的だった。休暇を楽しむ人々は、波打際の色とりどりのテントに寝そべったり、泳いだりしていた。子供たちは風を揚げ、カフェの前では若者たちが踊っていた。そこでは考えられるあらゆる国民が平和に群れ集っていて、特にドイツ語がよく聞かれた。毎年のことだが、近くのラインラントから避暑客たちが彼らの最も好むベルギー海岸にやってきていたのである。唯一の妨げは新聞売り子たちだった。彼らは売れ行きをよくするために、パリの諸新聞の威嚇的大見出しを声高に叫んでいたのだった。“オーストリア、ロシアに挑戦”とか“ドイツ動員準備中”とかいうように。人々が新聞を買った時、彼らの顔が曇る様子が見られたが、それもたいてい二・三分のことだった。結局のところわれわれは、すでに数年来この種の外交的紛争を知っていた。それはいつも深刻になる瀬戸際で、幸運にも解決されてきたのであった。今度もまたそうならないことがあろうか。一中略— しかし凶報が重なりいよいよ威嚇的になっていった。最初はオーストリア・ハンガリーのセルビアに対する最後通牒、次にそれに対する回避的回答、両国間の電報の応酬、最後にはもはや隠れもない動員。私はもはやそれ以上この狭い辺鄙な場所にいたたまれなくなった。よりニュースに近づくために小さな電車で毎日オステンデに通った。ニュースはいよいよ悪化していった。一中略— ところがそれからどんづまりの7月の日々がやってきた。一時間ごとに矛盾する別のニュースが届いた。一中略— 人々は事態が深刻になったことを感じた。海岸に突然冷たい不安の風が吹き、岸边を空っぽにしてしまった。幾千の人々がホテルを去り、列車は満員になり、最も楽観的だった人々さえ、今ではできるだけ速やかにトランクの荷造りを始めた。私もまた、オーストリアのセルビアに対する宣戦布告のニュースを聞くや否や、切符を確保した。間一髪だったのだ。このオステンデ発の急行列車がドイツに向う最後

の列車となったからである。乗客は廊下に立ち、興奮と焦慮に駆られながら誰もが他人と話していた。このような状態になっても、人々は依然として戦争を信じなかったし、ましてベルギーに対するドイツの進攻があらうなどつゆ信じなかった。信じられなかったというのは、人々がこのような狂気を信じたくなかったからである。――中略――翌朝いよいよオーストリアへ。どの駅にも総動員令の布告が貼られていた。列車は新たに召集された兵士で溢れており、旗が翻っていた。ウィーンで、私は音楽が鳴り響き町中が興奮しているのを見た。民衆も政府も誰も欲しなかったこの戦争、それを使って楽しみながら恫喝していた外交官たちの手から、不手際にも彼らの本当の意図に反して滑り落ちたようなこの戦争、この戦争に対する最初の恐れは熱狂に変わっていた。街頭では行列が組まれ、いたる所で旗やリボンや音楽が突然に燃え上り、その中で若い新兵たちが意気揚々と行進した。彼らの顔は明るかった。というのも日頃ならば誰も気にも留めない普通の人の彼らに、人々が歓声を送っていたからである。本当のところ私は告白しなければならないが、この最初の民衆の盛り上りのなかには、何か偉大なもの、感動的なもの、さらには魅力的なものさえあり、それから逃れることは難しかった程だ。そして戦争に対するあらゆる憎しみと嫌悪にもかかわらず、私はこの開戦の日々の思い出を、これからも見失いたくない。幾千・幾万の人々は、平和の時代にもっと感じていなければならなかったこと、彼らは一体であるということを、それまでにないくらい感じていたのだった。二百万人の一つの町、五千万人の一つの国は、自分たちの世界史を、二度とは巡ってこないであろう瞬間を相ともに経験していること、さらに各人はその小さな自我をこの熱狂している群衆の中に投じ、そこで自分の利己心を浄化するように呼びかけられていたのだということを、この時感じていたのだった。身分・言語・階級・宗教のあらゆる区別が、この一瞬間は奔流のような同志的感情に呑み込まれてしまっていた。見知らぬ人々が街頭で言葉を掛け合い、疎遠になった人々がまた握手を交わすなど、いたるところに生き生きとした民衆の顔があった。

一中略― 早くも女たちは軍服を着たあらゆる人々を賛美し、銃後に残る者たちはあらかじめ畏敬をこめて、この英雄というロマンティックな名前であれを送るのであった。一中略― 母親たちの悲哀、妻たちの不安さえもこの最初の興奮の日々には、その自然な感情を表わすことを恥じたのだった。」<sup>(5)</sup>

(2) このような熱狂・戦争熱や愛国心の全面的高揚が、帝国の全土でみられたわけではなかった。その「自然な感情」、すなわち総動員令によって夫や息子を兵士に「取られてしまった」人々の別離の悲しみや彼らの生命の不安が、緒戦から各地に広がっていった。首都ウィーンの興奮と戦争熱に隠された民衆の真情を、レーヴェンフェルト＝ルスは鋭く観察している。

「ウィーンでは動員が広範囲に及んでいます。市内の駐屯部隊はなお公式には出動していませんが。役所の同僚も高齢者を含めて多く召集されました。クッフナービール工場では労働者が多数召集されたうえ、ビール樽運搬馬車用の馬匹が車とともに全部徴発されました。一中略― 昨日私は砲兵部隊がリンク大通りを駅に向かって行進していく光景を見ました。何百人もの民衆がこの行進に付添っていましたが、その中のある老人が砲座に乗って進む息子に、涙ながら寄添っていました。私はその姿に喉を締めつけられる思いでした。みな不安なのです。これから何が始まるのか、一体どうなるのか、誰もが何も聞いていないからです」。「昨日ブローシェとカフェ・インペリアルで昼食した時、隣の席にマイアガンホーフ氏の未亡人と士官候補生姿の息子さんが座っていました。ブローシェが彼らに一言挨拶しました。すると突然彼女は泣き出してしまいました。おそらく、今のような時代、息子を持たないことの方が幸せなのでしょう。ここ数日の首都の熱狂と興奮はすっかり冷め、笑い声は消えてしまいました。」<sup>(6)</sup>

オーストリア・アルプス地方の山村でも肉親の召集をうけたある農婦は、その感情の激変ぶりを後年次のように回想している。

「私は今でも第1次大戦のときのことをよく憶えている。1914年、私の

義理の兄たちは徴兵検査を受けて上首尾で帰宅した時、彼らは上機嫌で歌をうたい、はしゃぎまわっていた。母や兄弟姉妹や雇人たち、家中の者が彼らの成果を歓迎した。彼らが検査に受かったことは家中の者の誇りだったのだ。彼らの飾り付き軍服、軍帽を見ることが、私の楽しみだった。—中略— 兄たちが一度に召集された日のことを、私は昨日のことのよう<sup>1</sup>に覚えている。あの検査に通って帰って来た日の喜びとは全くちがって、兄弟たちは悲しそうだったし、母は泣いていた。訳もわからず私も泣いてしまった。そして兄たちは遠くへ行ってしまったのだ。』<sup>(7)</sup>

第 1 次大戦の開戦当時、イタリア国境の町ゲルツで少女時代を過したドイツ系の一婦人は、開戦前後の様子を次のように回想している。

「6 月 29 日から最後通牒の日まで実に不安な日々だった。動員令が発令されると父たちは演習から即刻兵舎に帰還してきた。それからお別れの日がきた。父は戦争のためのガリツィアへ出征していった。子供だったので、私は戦争のことを正しく想像することはできなかったが、世間では大きな期待と興奮につつまれていた。人々は、クリスマスまでに戦争は終わりみんなでまた一緒になれると、信じこんでいた。しかし妻や母親たちはみんな泣いていたのだった。そしてこれは子供たちの気分をひどく刺激し、何ともいえず不安にさせた。—中略— 秋の新学期の学校で戦争の影響が強く感じられるようになった。ほとんどすべての家庭で父親は召集されていた。また多くの人々はトリェストやポーラで海軍の仕事に従事していた。父親からの便りで、子供たちは戦争での兵士の様子について話し合った。でもそれらはすべて単なる想像にすぎなかった。工作の時間になると、女生徒も男生徒もすべてが、兵士のためのえり巻きや靴下を編んだ。午後の自由な時間には、男女生徒が 2 人ずつで、赤十字のために奉仕活動を続けた。』<sup>(8)</sup>

事情に通じていた政府要人たちにもみられた「戦争にたいする不安」は、草の根レヴェルの「自然の感情」を、はるかに越えていた。レーヴェンフェルト＝ルスは、政府高官としてオーストリア経済の実態と戦争準備



の不十分さを知悉していたので、それだけに戦争とそれがもたらすであろう将来の帝国の運命に強い危惧の念をもっていた。彼は義父や妹に次のように書いている。

「人々の高揚した戦争気分は、戦争のために間もなく生ずるであろう際限のない困難のなかで、消え失せてしまうでしょう。産業界のすべてが混乱しているために、もうパニック状態です（7月31日付）。「ロシア・フランスとの戦争は不可避でしょう。私たちは今までの歴史に前例のないような世界の破局の前に立っているのです。これから数カ月の間にヨーロッパに起るであろう災禍を考えると、私の心臓は止りそうです。こんな時代に考えることは身の廻りの愛する家族のことだけです。（8月2日付）」  
「私の悲観的な予測は、今までのところ全部適中しました。この国が存続するためには、戦争に勝たなければなりません。部分的な或は一つの敗北は、帝国全体の敗北を意味していますし、財政的破滅でもあります。オーストリアとドイツの新聞では、イタリアについての報道が、すべて検閲によって差押えられています。イタリアにはわが国に対する敵意が感じられます。一中略一 民衆が今、イタリアについてどう思っているかを自由に書かせたとしたら、“イタリアは間もなく裏切る”と書くでしょう。（8月4日）」<sup>(9)</sup>

（3）すでに述べたように、オーストリア・ハンガリー帝国の一構成国オーストリアは多民族国家であった。総人口2,860万人のうちその民族構成は、ドイツ系35%、チェコ・スロヴァキア系23%、ポーランド系17%、ウクライナ系12%のほか、少数派のスロヴェニア系、セルボ・クロアチア系、イタリア系、ユダヤ系、ハンガリー系などとなっていた（第1表参照）。しかも領土内全域で多民族が平均的に混住していたのではなく、それぞれが歴史的に定住地域を異にしてきた。この国ではドイツ系が政治・経済の面で優位にたっていたが、人口数では第2位のチェコ系民衆は、1867年にハンガリーがアウスグライヒによって帝国の枠内で独立を成しとげた前例に学びながら、政治的自立を旨として政治運動を続けて

第 1 表 1910 年オーストリアの多民族構成、民族別識字率と主要宗教

民族別(使用語による)	人口数 (1) 1,000 人	同構成比 (2) %	識字率 (3) %	信仰する宗教 (比率)			
				第 1 位 %		第 2 位 %	
ド イ ツ	9,951	34.8	97	K	94	J	3
チェコ・スロバキア	6,413	22.4	98	K	96	E	2
ポ ー ラ ン ド	4,957	17.3	73	K	77	J	16
ルテニア(ウクライナ)	3,513	12.3	39	G <sub>1</sub>	90	G <sub>2</sub>	8
ス ロ ヴ ェ ニ ア	1,250	4.4	85	K	100	—	
セルボ・クロアチア	780	2.7	36	K	87	G <sub>2</sub>	32
イ タ リ ア	766	2.7	90	K	99	J	1
ル ー マ ニ ア	273	1.0	40	G <sub>2</sub>	98	G <sub>1</sub>	1
ハ ン ガ リ ー	10	—	64	K	96	E	3
外 国 人 そ の 他	657	2.3					
合 計	28,571	100.0	83	K	79	G <sub>1</sub>	12

1) 民族構成は主たる日常使用語 (Umgangssprache) による。識字率の原資料は文盲率で表示されているが、その定義は不明。原資料に従う。

2) 信仰する宗教 (Religionbekenntnis)

K=Kathorisch. E=Evangelisch. J=Jsraelitisch. G<sub>1</sub>=Griechisch-kathorisch. G<sub>2</sub>=Griechisch- und armenisch-orientalisch.

3) 使用語による区分ではユダヤ人という「民族」は統計上存在しない。が信仰する宗教では、131 万人 4.6%がユダヤ教徒であることに注意。

4) 出典 (1) ÖSH. 1914, 7. (3) Hm. Bd III /1, 77. (4)(5) ÖSH. 1913, 13.

いた。この運動は、1907 年に選挙法が改正され一般普通選挙法が実施された後に、ハプスブルクのスラブ政策に対する有力な批判勢力として、議会の内外で活躍するまでに発展していた<sup>(10)</sup>。彼らは、同じスラブ系のロシヤ人・セルビア人に親近感を抱いており、それまでも帝国のバルカン政策を批判し続けていた。そのため「プラハの民衆はウィーンと異なって醒めています。この町に熱狂は全く見当りません」<sup>(11)</sup> という状況だったのである。開戦当時のチェコ民衆の動向を、オット・バウアーは次のように述べている。

「1914 年ロシヤの大軍がドイツ国境に迫った時、チェコ民族が長い間夢みてきた時が到来したかに見えた。その時チェコ人兵士は、スラブ主義に

反対するゲルマン主義の事業のために、戦いそして死ななければならなかった。そして民族の歴史全体によって形成された民衆の感情は、必然的に戦争に反対した。チェコ人兵士は、ハプスブルクが彼らチェコ人のためではなく彼らの敵の事業のために戦いかつ死ぬことを強要したことを、最も屈辱的な隷属と感じていた。民族感情はハプスブルクにたいして必然的に反抗した。「我々はハプスブルクの軛からの解放に努力しなければならぬ。将来我々の敵の側で戦わなければならぬという強制のおそろべき苦悩から免れるために」とポフダン・パヴールは書いている。」<sup>(12)</sup>

事実開戦前から続いていたチェコ民衆の反ハプスブルク運動は、開戦直後から国の内外で一気に拡大した。強制的に召集されたチェコ人兵士たちは、開戦の日から 1918 年秋の戦争最終日まで戦わされたが、彼らは「議会に選出されているチェコ人政治家」と異なって、「老皇帝と祖国のために確信をもった兵士」ではなかった。この戦争は、彼らにとって何の名分もなかった。これは、戦争初期のロシア戦線で、多数の兵士が進んで投降したばかりでなく、戦争後期に彼らの部隊が編成され「反ハプスブルクの勇敢な兵士」としてかつての「祖国」に銃を向けることを厭わなかった事実に、よく示されている<sup>(13)</sup>。

ハプスブルク支配下のガリツィア（ポーランド・ウクライナ）ではチェコと事情が異なっていた。ガリツィア地方の総人口 800 万人のうち、ポーランド系 470 万人は主としてガリツィア西部に、ルテニア（ウクライナ）系 320 万人はガリツィア東部にと、ほぼ完全に住み分けられていた（1910）。そして宗教的にみてもポーランド系の 80% はローマカトリック教会信者、ルテニア系の 90% はギリシャカトリック（正教）信者とはっきり分かれていた（第 1 表参照）<sup>(14)</sup>。

ガリツィアのポーランド系民衆の大多数は、開戦当初皇帝の軍隊を歓呼して迎えた。「軍隊はロシアに向かって進軍したが、数千人ものポーランド人学生、知識人、労働者がこれに義勇兵として参加した。チェコ系、南スラブ系民衆はハプスブルクに反対していたが、同じスラブ系でもポーラン

ド民衆はハプスブルク側に立ち、その勝利を祈っているようだった」とパウアーは書いている<sup>(15)</sup>。

ツァー支配下のロシアとの歴史的関係が、チェコとポーランドでは大きく異なっていたことに加えて、国内的には、1867 年以来帝国内で独立を勝ちとったハンガリーに続き、独立をめざしていたチェコ民衆の政治的方向と、ハプスブルクの体制内で相応の政治的地位の確保を目ざすポーランド系エリートの路線の大きな相異が、戦争に対する民衆感情の相異に反映していた。

ガリツィア西部のルテニア（ウクライナ）系民衆は、ポーランド系と異なっており、19 世紀後半以降反ハプスブルク的感情を強めていた。民衆の大半は貧しい農民で農村に居住し、学校教育も普及していなかったため、民衆の平均識字率は 40% と帝国内諸地域の中では最低水準だった（第 1 表参照）。そのため政府による上からのオーストリア化の啓蒙・宣伝は、効果が少なかった。一方、地元出身のギリシャ正教の聖職者たちは、村々でその本務である宗教活動よりも、民衆にたいする宗教色の強い啓蒙活動や政治運動の組織者であり、民衆の経済的利益の擁護者でもあった。彼らによる反ハプスブルク運動は、草の根レベルで民衆の民族意識を高めていった。こうして 20 世紀初頭には、「ガリツィアをウクライナのピエモンテに変えていったのは、オーストリアの支配それ自体であった」と言われるほど、ハプスブルク支配から離れるようになった<sup>(16)</sup>。

ブコビナでも民衆はルーマニアの影響をうけていて、反戦的気分が広がっていた<sup>(17)</sup>。この地方出身のあるユダヤ系婦人は、開戦当時の民衆の気分を次のように回想している。

「まわりの人々は徴兵逃れのためあらゆる手段をとりました。検査の時病気だと申告したり、医者に賄賂を贈って偽診断書をもらったり、いろいろでした。――中略―― ちょうど戦争が始まった日、ほこりにまみれて行軍していた兵士の一人が、早々と戦争はいやだといっていました。彼ら兵士たちの中に戦意はうかがえませんでした。周囲の人々はウクライナ人が

主でしたが、彼らは反ハプスブルクだったのです。ユダヤ人たちもそうでした。ユダヤ人たちは親ハプスブルクでしたが、好戦的だったわけではないのです。」<sup>(18)</sup>

このブコビナでの経験と異なって、帝国内のユダヤ系民衆の多くは、戦争を肯定的に受け入れていた。それは、根強い反ユダヤ主義の牙城ツァーのロシアが、彼らユダヤ人の敵だったからであり、さらにこの戦争が勝利する過程で彼らの地位が最終的に確立するという期待を、抱いていたからである。多くのユダヤ系ジャーナリストは戦争宣伝に熱心だったし、数千のユダヤ人予備士官は積極的に軍隊に加わった。戦時下を通じて召集された約30万人のユダヤ人のうち、2万5,000人は士官（予備役）であった<sup>(19)</sup>。

帝国の東北部の辺境ガリツィア・ブコビナは、ロシアと国境を接しており、開戦すればすぐに対ロシア戦争の正面として戦火にさらされる地域を広くふくんでいた。そのため総動員令発令、対ロシア開戦（8月6日）とほとんど同時に、その全域が軍政に移管されて軍の直轄地域となり、8月中旬いごきびしい戦場になってしまった<sup>(20)</sup>。

## 2. 総動員令と戦時体制の発足

（1）帝国政府は、7月25日に部分動員令を発令して予備役軍人の5分の2を召集し、軍隊の戦時編成と戦闘準備を開始した。続いて7月31日には、対セルビア開戦とロシア軍の総動員令発令に応じて、総動員令を下して、軍隊を完全な戦争体制に転換させた<sup>(21)</sup>。

1867年のオーストリアとハンガリーのアウスグライヒによる「同君統治」の二重帝国成立いご、両国の軍制はともに次の三種の軍隊によって構成されていた。第1のグループは、皇帝が統轄する義務兵役制にもとづく正規軍としての帝国軍隊で、両国統一の鍵として共通予算により運営され、帝国軍事省の管轄下にあった。その通常現役兵力は、陸軍38万6,000人、海軍2万7,000人で、加えて予備役軍人が約126万人いた<sup>(22)</sup>。第2の

グループは、オーストリアでラントヴェー、ハンガリーではホンヴェートと呼ばれる地方防衛軍隊で、両国の国土防衛省に別々に統轄されていたが、事実上は帝国軍隊の指揮下に編入され一体化していた。その任務は、「平時時には国内の治安維持であり、戦時は帝国陸軍の補助」であった。この二種類の軍隊は協力して前線での戦闘任務にあたることになっていた。第3のグループは、地方民兵部隊で国土防衛省の管轄下におかれ、平時はごく少数の要員によって基本部隊を維持し、総動員令下には退役兵士から成る地方民兵勤務義務者を召集して、戦時部隊として編成されることになっていた。この部隊は32歳以上の退役兵士で編成される地方的補助民兵部隊であった<sup>(23)</sup>。帝国政府は、総動員令によりこれら三種類の予備役士官兵士を根こそぎ召集して、戦闘体制の確立を急いだのである。こうして帝国の陸軍は、頭数だけは集めたものの実戦の経験もないにわか編成の弱い軍隊のまま、精強なセルビア軍と8月中旬いご、全面的に対決することになった<sup>(24)</sup>。

この軍の総動員体制と並んで、平和時代の国内体制を戦時体制に転換するために、戦時立法の整備と行政権限の強化が、政府の緊急な最重要課題となった。1914年3月いご政府と対立状態にあった議会が閉会中であつたので、開戦当初政府は、これら一連の戦時立法を議会に諮ることなく、緊急時にのみ認められている皇帝の特別立法権を行使して、皇帝命令（緊急命令＝以下勅令）の形で発布し実施した。この皇帝による緊急立法権は、1868年のオーストリア憲法（十二月憲法）に規定されていた。この憲法は、2つの法律と4つの基本法から成っていたが、その一つ、「帝国の構成と組織を定めた法律」の第14条にその根拠があつた。この条文は、「議会閉会中あるいは緊急事態が生じた場合、皇帝は緊急皇帝命令（勅令）を発布できる」と定めたうえで、「この勅令は帝国（国有）財産に負担を与えたり、その売却を伴ってはならないこと、発令4週間以内に議院に提案されない場合、あるいは両院の片方でもそれが否決された場合には失効する」と但書していた<sup>(25)</sup>。この14条は、政府にとってまことに便

利な規程であり、1867年から1904年の間に106勅令、その後1918年の帝国解体までに176勅令、合計282回利用されている<sup>(26)</sup>。

この緊急勅令と政(省)令の二方式によって開戦当初に発令された一連の戦時法令のうち、注目すべきものを発令順に検討しておこう。

7月25日に次の緊急勅令が出された。〔1〕対セルビア戦争に備えてボスニア・ヘルツェゴビナ・ダルマチア三地域における行政権を軍政に移行する。〔2〕地方官庁・公共機関の全組織とその職員に一切の軍事行動と国土防衛業務にたいして協力義務が課される。この義務違反にたいしてはきびしい罰則が課される。〔3〕公的業務や公的企業の運営にたいする妨害行為にたいして特別の罰則が強化された。この規程は、戦争遂行法の運用開始と共に、一般民衆の特定行為に軍刑法(軍事法廷)を適用するまで拡大された<sup>(27)</sup>。

政令には内閣命令(政令)と各省命令(省令)の二種類があり、既存の法令の改正あるいは発効のさいに適用された。7月25日の政令は次のとおりである。〔5〕現行法の適用除外令,〔6〕特定地域における旅券の効力制限令,〔7〕武器火薬類の所持およびその取引にたいする規制令,〔8〕陪審裁判制度の停止令,〔9〕反国家的活動にたいする軍刑法適用令,〔10〕電信電話の規制・監視・検閲令。同日の省令は次のとおりである。〔11〕セルビアの定期刊行物印刷物の配布禁止と非定期的出版物の検閲令,〔12〕軍事情報の印刷公開禁止令,〔13〕兵役拒否越境逃亡者の防止令,〔14〕郵便物取扱(検閲)特令,〔15〕多数の商品類の輸出入および国内通過の禁止令,〔16〕戦争遂行法の発効令。続いて26日に〔17〕戦時鉄道運行規則の発効省令。30日に〔18〕登録済馬匹の移動禁止省令,〔19〕戦争遂行法によって徴発された馬匹・車輛にたいする補償省令が發布された。7月31日には〔20〕日曜祭日の休暇制限勅令,〔21〕行政権限の委任勅令,〔22〕私法的請求権にたいする猶予勅令(金融機関の支拂制限=モラトリアム勅令)という三つの重要勅令が發布され、これにより地方行政組織の権限(地方自治的権限)の多くが中央政府に移管されるとともに、

8 月 1 日から 2 週間の期限付きモラトリアムが実施されることになった。同じく 31 日に政令として、〔23〕日曜祭日の休暇制限令、〔24〕海上船舶運行制限令、〔25〕航空機使用秘匿令、8 月 1 日に〔26〕非常事態期の生活必需物資供給にかんする勅令、3 日に〔27〕ドイツ軍の動向の報道禁止勅令、がそれぞれ発布された。4 日に〔28〕ロシアにたいする諸商品の通過輸送の禁止令とロシアの定期刊行物配布禁止と印刷物の検閲省令が、ついで 5 日には、〔29〕穀物収穫のための労働力臨時調用令が勅令と政令として発布されている<sup>(28)</sup>。これらの戦時諸立法は、民衆生活にどのような影響を与えたであろうか。

（2） オーストリア民衆の基本的権利は、1848 年の三月革命いご、紆余曲折を経て制定された十二月憲法の「市民の一般的権利についての基本法」に、19 項目にわたって確定し明記されていた。そこには信書の秘密、集会結社の自由、意見開示（言論）の自由、移動の自由、検閲の禁止などが、とうぜん含まれていた<sup>(29)</sup>。しかし政府による戦時体制への強行的転換が上記の戦時諸立法を根拠に開始されると、オーストリア憲法に明記されている人民の基本的権利にたいする明白な侵害が始まり、戦争の期間を通じて強められた。

7 月 26 日、電話の盗聴、電信の規制、新聞の事前検閲が始まった。「（7 月 26 日）はじめに私が戦争という言葉を口にしたら、電話局職員は、電信電話法第 4 条によって電話を切ってしまった（レートリッヒ日記）。」<sup>(30)</sup>「何か特別のことが起らない限り、私は電報を使わないようにします。それはあらゆる困難を私たちにもたすかも知れないからです。電信にさいして、人々は自分の身分を証明しなければならず、そうしないと電文ははずたずたに消されてしまうからです。」<sup>(31)</sup>当時の電話設備は旧式で、接続のために交換手が必要だったから、電話の盗聴はいつでも可能だったのである。「きびしい検閲が始まったので、新聞には空白欄 — 事前検閲で記事が削除され時間がないまま印刷された新聞の一部分 — があります。また個人の電信も検閲されています。」<sup>(32)</sup>新聞検閲は全国で実施され、言



論出版の自由は完全に失われた。「7月25日基本的権利についての規程が停止され、検閲制度が全面化された。8月2日には早くも保守的な新聞フォラルベルガー・フォルクスブラット紙に白刷り紙面が現われた。新聞に発表を許されたニュースは、排外主義と戦争宣伝のための「ウソ」の記事だけだった。同時に電信と電話はきびしい制限と監視下におかれた。とくに国境地域のこのフォラルベルクでは、国境をはさんでの通話がいまや不可能になった。旅券検査は嚴重をきわめ、市民の自由な出入国も不可能となった。市民にたいする軍刑法の適用も始まった。」<sup>(33)</sup> こうして新聞は何も伝えなくなった。誰も、何がどうなったのか、何が起っているのか、わからなくなった。「こんなはずではなかったのに」。噂が噂を呼び民衆の不安は拡大していった。

郵便物の遅延が目立ちはじめた。それは、開始された手紙の検閲・多数の郵便職員の召集、総動員令に伴う部隊輸送が錯綜停滞して、郵便列車が遅れたことなどが原因だった。郵便列車の運行回数は激減し、その速度は平時の半分以下になった。これらの情報交換の規制と大幅な遅れは、市民生活を妨げたのみでなく、あらゆる種類の企業の経済活動を、一時的に停止させるほどにまで悪化した。

人と物資の輸送面で困難が広がった。まず小運送の機能が麻痺に近い状態になった。戦争遂行法が発効し、小輸送にあたる人と車輛と馬匹が徴用されたうえ、多くの関係者も召集されたからである。1910年代のオーストリアでは、小運送の面で貨物自動車の普及率はなお低く、荷馬車の役割りが大きかったから、その徴発は物流に大きく影響した。とくに大都市で、ウィーンでそれが目立った。「車輛、自動車、馬車すべてが徴発されました。工場や会社の貨物自動車はすべて軍の物資を運送しています。一中略一 停車場には今や一台の自動車も馬車ありません。市電の運行はすでに制限されているので、どの車も満員状態です。」<sup>(34)</sup> この結果、ウィーン市内では食糧を中心とする生活必需品が品薄となり、不安に駆られた民衆の買い漁り、買溜めが広がり、ウィーンでは食糧品価格が騰貴し

はじめた。

開戦は鉄道輸送にさらに大きい困難をもたらした。1837 年この国で私企業によって鉄道建設が始められてから、鉄道路線は、つねにウィーンを中心に放射状に延長され、ついでこれらを結ぶ南北の路線が建設されることにより鉄道網として充実してきた。開戦時点の国有鉄道の延長は、1 万 8,500 キロメートル（うち複線区間 2,500 キロメートル）、民有鉄道 3,300 キロメートル（うち複線区間 1,100 キロメートル）、合計約 2 万 2,000 キロメートルに達していた<sup>(35)</sup>。

しかし鉄道の普及度は、面積当りの延長距離や延長距離と設備の比率からみて、他の西欧諸国に比してはるかに劣っていた（第 2 表参照）。20 世紀初頭からオーストリア・ハンガリーでは、来るべき戦争が、セルビア・ロシア・イタリアの三面戦争になることを想定して、軍備計画が検討された。その際、戦時における鉄道輸送の重要性が認識されていたが、とくにボスニア・ヘルツェゴビナの併合とバルカン戦争に対応して、1909 年に策定された戦争準備計画の一つが、「戦時鉄道輸送計画」だった<sup>(36)</sup>。

7 月 30 日にこの戦時輸送計画が実施に移される直前の 25 日から 30 日の間、鉄道輸送は大混乱におちいった。鉄道は、兵士と軍事物資をあらかじめ計画された場所まで輸送するという緊急業務に加えて、国内各地に散

第 2 表 ヨーロッパ諸国の鉄道普及状況 1913 年

国 名		オーストリア	ハンガリー	ドイツ	フランス	イギリス	ベルギー
鉄道路線 距 離	面積 100 km <sup>2</sup> 当り (km)	7.7	6.6	11.6	9.4	12.0	29.3
	人口 10,000 人当り (km)	8.0	10.1	9.5	12.8	8.3	11.7
うち複線部分比率 (%)		22	6	37	44	56	49
路 線 100 km <sup>2</sup> 当 り	機関車数 (台)	33	20	47	33	61	98
	客 車 数 (台)	67	43	106	76	141	182
	貨 車 数 (台)	652	465	1,066	886	2,091	2,060

1. 一部の数字は 1911, 1912 年のもの

2. Hm. Bd.1, 304.

ばっていた夏休の避暑客の引揚げ輸送をもさばかなくてはならなかった<sup>(37)</sup>。7月31日から鉄道輸送では軍事輸送業務が最優先されたのである。総動員令が発令された以上、2週間に以内に100万人以上の兵員とその装備を前線の特定点に送り届けなくてはならなかった。戦時編成された1個師団約1万5,000人の兵力を輸送するために、大砲・弾薬・馬匹を別にしても、6列車が必要だった。そして兵力100万人と馬25万頭の軍隊にたいして、1日最低で4,000トンの補給が必要であったから、鉄道輸送の困難は軍の展開が進むほど深刻になっていった<sup>(38)</sup>。8月6日いご、一部近距離列車を除いて民間の旅客輸送は一切停止され、鉄道業務は軍事業務に集中されたのである。この大切な時期に鉄道部内で深刻な問題が起きていた。総動員令のために若い鉄道員が続々と召集され、「人手不足」に陥ったのである。「前線での鉄道業務はきわめて苛酷で非人間的だった。たとえば東部戦線のある運行責任者の場合、72時間連続して勤務し、毎日80から100列車をさばいた。とくに戦闘地域の業務は、全く計画が立てられず、1日5〜6時間の睡眠で1週間全く休暇なしの連続勤務しなければならないことさえ、しばしばあった。」<sup>(39)</sup> しかも戦争遂行法が全現業組織に適用され、鉄道業務も軍管理に移されたため、組合活動や団体交渉が禁止されるだけでなく上からの強権的管理が進められて、鉄道は準軍事組織に転化した。

開戦当初の鉄道が民間の貨物輸送を全面的に停止したことは、小輸送の停滞以上に民衆生活と経済活動に打撃を与えた。ウィーンで商人や小営業者の多くは、取扱商品や原料入荷が滞ったために営業を休むものが急増した。工場も原料の入手難のため、操業度の低下や休業が広がった。輸送手段を失って、製品の販路を閉された小営業者や企業家も、臨時休業を余儀なくされた。建築業者はとくにひどかった。ウィーン周辺やプラハ周辺の繊維産業でも原料入手手段、販売市場を共に閉されて、操業を停止する例が増加した。企業主は労働者の解雇をはじめ、失業者が街にあふれた。ウィーンのようにごく零細な衣料産業従事者の多いところでは、「お

針子」の失業が増えた。総動員令によって、若い男性が急減しつつある時に、操業をとりやめる企業が増加し、求職者が増加するという現象が一般化していった。そのため開戦とともに失業問題が急に深刻化したのである。

民衆の多くはすでに騰貴をはじめた食糧をはじめ、生活必需品の買溜めのために現金を必要とした。召集された兵士は、出征していく自分のため、あるいは残される家族の生活のために、現金が必要だった。商人や小営業者も一時的継ぎ資金が、工場経営者も資金の手配が必要となった。そして何よりも軍は、総動員令の実施過程で莫大な物資の買付けをしなければならなくなった。誰もがそれぞれに何程かの資金を必要とした。これらの人々は銀行へ向ったのだった。7月最後の一週間金利が次々に上げられる中で、全国各地の金融機関から巨額の資金が引き下された。現金、とくに小額紙幣・硬貨不足が深刻化した。「戦時体制」の発足に当って政府は、何としても金融騒動を避けなくてはならなかったもので、当面の緊急対策として、8月1日、皇帝命令により2週間を第1期とするモアトリウムを実行した。

若者が召集され、残された人々は失業の恐怖に直面した。なけなしの現金を握って民衆は市場を走り廻った。数日前までの戦争の熱狂は冷めはじめた。戦争はどうなっているのか、民衆に知る手段はなかった。しかし民衆はあらためて自分たちの生活の現実を見ることはできた。そしてめざめはじめた彼らの不安は、次第に現実のものとなっていった。

#### 《注》

- (1) この点に関連してレートリッヒは次のように述べている。「社会民主主義とその影響下にあって、原則的には確固としていた戦争反対勢力は、当初から戦争熱によってあまり惑わされることがなかった。しかしこれと並んでオーストリアにおいては、ヨーロッパの平均的民衆の中で19世紀以来伝統的であった考え方、すなわち和解しがたい国家的利害解決のための最終的審判者としての戦争は必要であるという考え方、あるいは少くともそれは避け難いとする考え方が広く存在していた。そして戦争は、諸民族と世界の歴史

的推移のなかで、大きな推進力であるとされていた。そして同様にナポレオン戦争以来形成されたところの、戦争へのあこがれや戦争讃美の伝統が、大きな勢力をもっていた。その伝統が一般義務兵役制を、国内に十分に浸透させたのである。民衆は戦争をハプスブルク帝国存亡に関する必須事だと思っており、そしてそれはセルビアとロシヤから強制された信じこんでいた。」Redlich, J. : Österreichische Regierung und Verwaltung im Weltkrieg, 1931, 113.

- (2) ストープラー : Der Krieg, ÖVw. 1914. 8. 1. 833-835. 彼はこの論文で同時に帝国内のスラヴ系民族、とくにチェコ人の動向を深く憂慮していて、もしこの戦争に敗れば、「多民族国家としての帝国は崩壊する」と予見していた。この見方は帝国の最上層部に共通だった。ハニッシュは、参謀総長ヘッツェンドルフの「積極的な目的をもった攻撃的政策こそが、帝国の没落を救い成果をあげることができる」という方針を、「この冒険政策は強さより弱さの表われだ」と批判的に紹介した。さらに開戦前夜の老皇帝の発言「帝国が没落の運命にあるというのなら、せめて毅然として行こうではないか」を、「何という残酷な非人道的な表現だろう、皇帝はその威厳のために数百万の無辜の人命を犠牲にしたのだ。」ときびしく批判している。Hanisch, E. : Der lange Schatten des Staates. Österreichische Gesellschaftsgeschichte in 20. Jahrhundert, 1994. 文献 116, 235-236.
- (3) Loewenfeld=Russ, H. : Im Kampf gegen den Hunger, 1986. 文献 114, 9.
- (4) Fontana, J. : Geschichte des Landes Tirol. Bd.3, 文献 115, 1985, 411-412.
- (5) ツヴァイク昨日の世界 原田義人訳 文献 101, 323-330. フィッシャー版 Die Welt von Gestern, 253-259. により一部改訳。ハニッシュも開戦の経過について、ツヴァイク同様の指摘をしている。「マルクス主義的解釈と異なっていて、少くともオーストリアに関する限り、開戦の決定について大企業が何らかの影響を与えたということを、誰も未だ証明しえていない。それはほとんど外交官の遊戯の継続だったのだ。」ハニッシュ 116, 235.
- (6) レーヴェンフェルト=ルス 114, 9-10. 妻と妹への手紙から抄訳。
- (7) Passrugger, B. : Hartes Brot. Aus dem Leben einer Bergbäuerin, 1989, 24. 他地方でも同様の反応がみられた。「20歳の若い農民のことを私は忘れることができない。丁度道の向う側で、彼は扶養している老いた母親に別れを告げていた。彼は涙で頬を濡らしてむせび泣いていた。しかし彼は召集された皇帝の兵士として家の前で歓声で送られていたので、勇気をだし

てその歓声に応えようとした。しかし彼は泣いていてそれができなかった。」ハニッシュ 116, 238.

なお、パスルウガハはこの本と続編 Steiler Hang 1993 で、20 世紀前半期のアルプス地方の農民家族、農村社会、農業生産の実態をわかり易く生き生きと伝えている。

- (8) Holzer, G. : „Auf der Piazza Bertolini standen einander die drei verschiedensprachigen Schulen gegenüber“ in Tesar, E. : Hände auf die Bank.... Erinnerung an den Schultag, 1985, 112–114. ホルツァは、当時イタリア国境守備隊に勤務する下級士官の娘だった。この回想で彼女は開戦時の緊張状態、中立宣言後のイタリア国境のきびしい監視ぶり、戦時下の小学校生活などの日常生活を活写している。

- (9) レーヴェンフェルト＝ルス 114, 11–12.

開戦にあたってハンガリー首相ティサさえ逡巡していた。「対セルビア問題でティサは当初外交的解決を望んでいたが、最強の同盟国ドイツの武力による解決方針を知るに及んで、止むをえず意見を変えた。」Deák, I. : Beyond Nationalism, 1992. 文献 118, 75. アンディクスも「議会でティサ首相は平和の維持こそ外交の基方針（7 月 8 日）、対セルビア政策を明確にすることにより、必然的に戦争を避けえなくなるとは認識していない（7 月 15 日）、と述べた」と書いている。Andics, H. : Der Untergang der Donaumonarchie. Österreich-Ungarn von der Jahrhundertwende bis zum November 1918, 1976. 文献 106, 106–111.

- (10) Wandruska, K./Urbanisch, P. : Die Habsburgermonarchie 1848–1918, Bd. III, Die Völker des Reiches, 513–521.

1907 年ベック政権のもとで一般普通選挙法が制定、実施された。選挙権者の要件は、「24 歳以上の国籍を有する男性で同一地に 1 年以上居住する者」であり、被選挙権者は、「30 歳以上の国籍を有する男性で同一地に 3 年以上居住する者」であった。この一般普選実現には長年月を要したが、女性には参政権を与えられなかった。婦人参政権獲得のために組織的運動が始まったのは、1913 年にウィーンで 23 カ国の代表参加のもとで開催された国際婦人参政権会議からとされている。大戦以前、普選は二度（1907, 1911）実施された。Ucakar, K. : Demokratie und Wahlrecht in Österreich, 1985. 文献 119, 353–370. ハニッシュ 116, 230.

- (11) レーヴェンフェルト＝ルス 114, 8.

- (12) Bauer, O. : Die österreichische Revolution, in: Werkausgabe 2 [525–526]. オーストリア革命, 酒井晨史訳, 文献 117, 40（一部改訳）。

- (13) Hm. Bd. III / 1 518-519. 開戦当日からロシア・フランス・イギリス・アメリカ在住のチェコ人の間に、反ハプスブルク義勇軍組織化の動きが始まった。1914 年 12 月マサリックの海外亡命はこの運動に拍車をかけた。パウアー 117, 45-46 [530-531].
- (14) Hm. Bd. III / 1 566-567. Österreichisches Statistisches Handbuch (ÖSH.), 1913, 13.
- (15) パウアー 117, 55 [539].
- (16) Isaievych, I. : Galizia and Problems of National Identity, in: Robertson, R./Timms, E. The Habsburg Legacy, 1994, 37-45.
- (17) ブコビナ民衆の中での親ルーマニア感情については、Hm. Bd. III / 1 615-625. ルーマニアは 1916 年 8 月 27 日オーストリア・ハンガリーと開戦した。戦後ブコビナの大部分はルーマニア領土に編入された。
- (18) Friedjung, P. : „Wir wollten nur das Paradies auf Erden“: Die Erinnerung einer jüdischen Kommunistin aus der Bukowina, 1995, 114-116.
- (19) ディアーク 118, 195-196.
- (20) 開戦から 2 年余りの間の激戦地、ガリツィアのレムブルク地域の民衆生活については、(18) フリートユンク, 116-121 参照。
- (21) アンディクス 106, 120, 1914. 7. 31.

Verordnung der Ministerien für Landesverteidigung (以下 VML.) und des Innern (以下 I.) im Einvernehmen mit den übrigen beteiligten Ministerien zur Durchführung der Kaiserlichen Verordnung (以下 KV.) vom 4. 7. 1914, R. G. Bl. (以下 RGBL.) Nr. 141, betreffend das K. K. österreichische Kriegerkorps. RGBL. 180.

- (22) 帝国の軍隊の全体的組織構成については Hm. Bd. V が基本的文献だが、とくにこの点については 417-423, 491-493 参照。

1910-13 年平均の両国 (帝国) 共通財政支出総額は約 6 億クローネで、その 96% が軍事省関係支出額であったから、共通財政は「帝国軍隊」のためにあったとさえいえよう。その他の支出は外務省関係 3% と、会計検査院関係 1% であった。この軍事省関係支出額は、オーストリア政府年間財政支出総額の 3 分 1 程度に相当した (ÖSH, 1912, 468. 1914, 418)。

1912 年度帝国陸軍 (Heerwesen) と海軍 (Kriegsmarine) の人的構成は、次表のとおりである。

陸 軍	現 役	予備役	計* <sup>1</sup>	海 軍
高 級 士 官 ①	392	36	428	
一 般 士 官 ②	18,326	14,659	33,358	
事 務 官 ほ か* <sup>2</sup> ③	6,091	3,825	10,003	
小計 ①+②+③=④	24,809	18,484	43,789	847
士 官 候 補 生 ⑤	2,057	14,172	16,229	
一 般 兵 士 ⑥	359,176	1,223,703	1,582,879	25,022
合計 ④+⑤+⑥=⑦	386,042	1,256,359	1,642,897	26,976* <sup>3</sup>

1. \*<sup>1</sup> 休職者をふくむ。\*<sup>2</sup> 事務官、医師、獣医師、技術者をふくむ。身分的には Beamte 待遇のもの。\*<sup>3</sup> その他を含む。  
 2. ÖSH, 1912, 458-466.

1912 年オーストリアの地方防衛軍隊の兵力数は次表のとおりである。

一 般 士 官	3,696
技 術 士 官	554
事 務 官 ほ か	975
小 計	5,225
士 官 候 補 生	294
一 般 兵 士	48,187
合 計	53,706

1. 他に軍学校関係 457 人  
 2. ÖSH, 1912, 456.

- (23) 1886 年 6 月 6 日に発布された「地方民兵隊法（仮訳）Landstrumgesetz= Das Gesetz vom 6. Juni 1886, betreffend den Landstrum」の主な特徴を説明しておこう。この法律（以下 LS 法）は皇帝命令によって発効する。その適用範囲は国防の必要により定める。召集された要員（地方民兵勤務義務者=Landstrumpfpflichtige）は、皇帝に任命された軍司令官の指揮に従う。彼らに軍法（律）が適用される。

LS 法の目的と要員の任務は、1889 年 12 月 20 日の政令により概略次のように定められた。

- ① 法の目的は、帝国の軍事力強化にある。帝国陸軍（Heer）と国土防衛軍隊（Landwehr）の支援活動として、技術的衛生的事務的な補助業務を分担し実戦部隊を支援する。  
 ② 要員は、戦争目的にそった技術的事務的な仕事、輸送業務、傷病兵の看



護などにあたる。

- ③ 要員は、正規の陸海軍、地方防衛軍隊、軍用輸送部隊には配属されない。彼らの技能・職歴に応じて広い意味の戦争目的業務に配属される。
- ④ 要員は配属先の場所或は組織（企業・工場・輸送組織など）毎に集団（グループ）として行動する。ここでの労働関係は、従来の私的契約関係によらない。要員は自由に職場を離れたり変えたりできない。経営者は要員にたいし、一定の賃金支払い、生命と健康維持の対策をたてる義務を負う。
- ⑤ 要員は軍法の適用を受ける。
- ⑥ 適用年齢は 20 歳から 42 歳までの男性である。

もともと Landstrum は退役兵士の意味であり、LS 法は、この退役兵士を必要に応じて戦時に再召集し、準軍務に付させる権限をもつ。兵役法（1912 年 7 月 15 日改正）の 17 条は、兵役義務年齢期間（20～42 歳）の男子を、総動員令発布令中あるいは戦争期間、直接的戦闘任務ではなく後方支援をふくむ戦闘関連業務に動員することがあると定めた。同法の補足として発布された 1912 年 7 月 27 日付政令の 17 条で、この関連業務を次のように定めている。軍に必要な装備に関すること、軍用鉄道および軍輸送関連業務（馬夫、蹄鉄夫厩番、運転手）、艦船の修理補給業務。Hanusch, E./Adler, E.: Die Regelung der Arbeitsverhältnisse im Krieg. 1927. 文献 121, 39-43.

なおこの部隊について興味あるエピソードを紹介しておこう。「7 月 31 日 フーゴがやってきて私に助けを求めた。彼はラントスツルムの士官としてイストリアのピシノに召集されたというのだ。私はコンラッド・ホーヘンローエに手紙をかき、フーゴに託した。今日、私は彼が 8 月 28 日まで特別な休暇を認められたこと、ピシノからグラツへ配置換えになったことを聞いた。彼は私に感謝の手紙をよこした。」「7 月 31 日 42 歳までのラントスツルム要員が召集された。パウルも召集された。彼は私に何か手段を講じてくれるよう依頼してきた。彼が軍需物資の製造供給業者として、必要不可欠の人材だといってくれるようにと。私はホヨと相談した。彼はストゥールクに話すようすすめてくれたので、私は彼にこの件を頼んだ。一中略―彼の団体がランドスツルム義務の対象を免除されることになり、パウルは召集を解除された。彼は私に強く感謝した。（何れも 8 月 3 日、レートリッヒの日記から）。何という情実とシュランピッヒな世界!! ホヨは政府の高官であり、ストゥールクは首相なのだ!。そしてフーゴは、フォン・ホフマンスタール（1874-1929）だったのだ。R 日記 241-242.

- (24) 「帝国陸軍は多くの欠点があった。実戦の経験がなく歩兵は近代戦が必要とする水準の訓練を受けていなかったし、装備も劣っていた。とくに機関銃の不足が致命的だった。輸送部隊は部分的にはラデッキー将軍時代のままだった。砲兵も旧式で参戦国では普通に装備されている大口径の重砲は見られなかった。騎兵はパレードでは華麗な姿をみせるが、戦地では意味なく突撃して機関銃の前に死んでいった。—中略—セルビア軍はバルカン戦争で経験を積んでおり、戦場の地形を熟知していた。その戦意も旺盛だった。」フォンタナ 116, 411-414. なお, Jelavich, B.: *Modern Austria*, 134-135. にも同様の記述がみられる。

- (25) 皇帝命令（緊急命令＝勅令）Kaiserliche Verordnung (Notverordnung) = 以下 KV. と表示。Baltl, H.: *Österreichische Rechtsgeschichte*, 1982. 文献 120, 120-134. Hoke, R.: *Österreichische und deutsche Rechtsgeschichte*, 1992, 393.

オーストリア憲法の 6 法律は以下の通りである。

- [1] Gesetz (以下 G.) v. 21. 12. 1867 (以下同日), wodurch das Grundgesetz über die Reichsvertretung v. 26. 2. 1861 abgeändert wird, RGBl. 142.
- [2] Staatsgrundgesetz (以下 SG.) v. ——— über die allgemeinen Rechte der Staatsbürger, RGBl. 143.
- [3] SG. v. ——— über die Einsetzung eines Reichsgerichtes, RGBl. 144.
- [4] SG. v. ——— über die richterliche Gewalt, RGBl. 144.
- [5] SG. v. ——— über die Ausübung der Regierungs- und Vollzugsgewalt, RGBl. 145.
- [6] G. v. ——— betreffend die allen Ländern der österr. Monarchie gemeinsamen Angelegenheiten und die Art ihre Behandlung, RGBl. 146.

この憲法発布以後、オーストリアは公式には „Westliche Reichshälfte“, „Zisleithanien“, „Königsreiche und Länder“ と呼ばれることになったが、特記しない限りここではオーストリアと表示する。バルトル 120, 230-240, Hm. Bd. II, Verwaltung und Rechtswesen, 731.

- (26) ハニッシュ 116, 231.

- (27) [1] Kaiserliche Verordnung (以下 KV.), betr. die Übertragung von Befugnissen der politischen Verwaltung an den Höchstkommmandierenden der Streitkräfte in Bosnien, Herzegovina und

Dalinen, RGL. 154.

- [ 2 ] KV. ü. die Mitwirkung der Gemeinden und öffentlichen Beamten an den Aufgaben der Landesverteidigung und die Bestrafung der Verletzung einer Amtspflicht, RGL. 155.
- [ 3 ] KV. ü. die Bestrafung der Störung des öffentlichen Dienstes oder eines öffentl. Betriebes und der Verletzung einer Lieferungspflicht, RGL. 156.
- [ 4 ] 略 RGL. 157.
- (28) [ 5 ] Verordnung des Gesamtministerium (以下 VGM.), womit Ausnahmen von den bestehenden Gesetzen verfügt werden, RGL. 158.
- [ 6 ] VGM., womit beschränkende politische Anordnungen über das Passwesen erlassen werden, RGL. 159.
- [ 7 ] VGM. ü. den Besitz von Waffen, Munitionsgegenständen und Sprengstoffen und den Verkehr mit denselben, RGL. 160.
- [ 8 ] VGM. ü. die Einstellung der Wirksamkeit der Geschworenengericht, RGL. 163.
- [ 9 ] VGM., womit Zivilpersonen, die sich strafbarer Handlungen wider die Kriegsmacht des Staates schuldig machen, der Militärstraßgerichtbarkeit unterstellt werden, RGL. 164.
- [10] VGM. ü. die Einschränkung und Überwachung der Telegraphen- und Telephonverkehrs, RGL. 167.
- [11] Verordnung der Ministerien (以下 VM.) des I. und der J. im Einvernehmen mit den Ministerien der F. und des Handels, womit die in Serbien erscheinenden periodischen Druckschriften verboten……RGL. 161.
- [12] VM. des I. und der J., womit die Veröffentlichung militärischer Nachrichten in Druckschriften ausdrücklich verboten werden, RGL. 165.
- [13] VM. für Landesverteidigung (以下 VML.) und M. des I., betr. die Verhütung von Wehrpflichtverletzungen durch Grenz überschreitung, RGL. 166.
- [14] VM. des H. und des I. ü. die Behandlung der Postsendungen, RGL. 162.
- [15] VM. des I. der F., des H. und des A., womit die Einfuhr

mehever Artikel verboten wird, RGBl. 168, 169. (Ausfuhr, Durchführungの禁止令)

- [16] VML., mit der auf Grund……, betr. die Kriegsleistungen, der Zeitpunkt des Beginnes der Verpflichtung zu Kriegsleistungen verlautbar wird, RGBl. 170.
- [17] V. der Eisenbahnm., betr. Ausführung der Vorschrift……des Eisenbahnbetriebsreglement v. 11. Nov. 1909, RGBl. Nr. 172, RGBl. 173.
- [18] VML., womit verboten wird, Evidenzblattpferde aus ihren Aushebungsbezirk zu entfernen, RGBl. 179.
- [19] VML. ……gemäß den Gesetz v. 21. Dez. 1912……betr. die Stellung der Pferde und Fuhrwerk, die Vergütungen……RGBl. 185.
- [20] KV. ü. die Sonn- und Feiertagsruhe im Gewerbebetriebe, RGBl. 183.
- [21] KV. betr. die Übertragung von Befugnissen der politischen Verwaltung.
- [22] KV. ü. eine Stundung privatrechtlicher Forderung, RGBl. 193.
- [23] VH. im Einvernehmen mit……, betr. die Regelung der Sonn- und Feiertagsruhe im Gewerbebetriebe, RGBl. 184.
- [24] RGBl. 190. [25] RGBl. 191.
- [26] KV. mit welcher für die Dauer der durch den Kriegszustand verursachten außerordentlichen Verhältnisse Bestimmungen ü. die Versorgung der Bevölkerung mit unentbehrlichen Bedarfsgegenständen getroffen werden, RGBl. 194.
- [27] RGBl. 195. [28] RGBl. 197.
- [29] KV. wegen Erlassung von infolge des Kriegszustandes notwendigen Anverordnung zur Sicherstellung der Ernte- und Feldbestellungsarbeiten, RGBl. 199.
- (29) バルトル 120, 235. 本稿注 25 参照。  
なお外国への移住の自由権には兵役法の制約があった。
- (30) 阿部正昭, 民衆生活と戦争経済（その 1）, 経済志林 60 巻 3・4 号, 286.
- (31) レーヴェンフェルト＝ルス 114, 8.
- (32) 同上 114, 7.
- (33) Bilgeri, B. : Geschichte Voralbergs Bd.4, 582–586.
- (34) レーヴェンフェルト＝ルス 114, 11–12.

- (35) Enderes, B. : Verkehrswesen in Österreich. Die österreichische Eisenbahn, 1931. 文献 120, 5-7.
- (36) Kriegsfahrordnung, 1909. 11. 11, RGBl. 172.
- (37) エンデレス 120, 18-19.
- (38) M. S. : Der Krieg und die Eisenbahn. ÖVw., 1914. 8. 19. 888-889.
- (39) Hoffmann, P. : Der Krieg und die Bevölkerung. ÖVw., 1914. 8. 1. 839-842.

(未完)